

「転生した大聖女は、聖女であることをひた隠す」 人気投票開催記念SS

【SIDE】第一騎士団長シリル「騎士の誓い」

私——シリル・サザランドは筆頭公爵家の嫡子として生まれ、17歳で公爵位を継いだ。

加えて、父は前国王の弟、母は次席聖女と、生まれた時から聖女を尊ぶべき立場にあった。

にもかかわらず、私はずっと、聖女に対して矛盾した思いを抱えていた。

聖女は国の礎いしずえで、何よりも尊い存在であると敬う一方、その言葉の端々に表れる自分たち以外を見下す態度を残念に思い、同意できないものを感じていたのだ。

戦場で聖女とともに過ごす機会が増え、彼女たちを知るほどに、王国が長年かけて作り上げた「慈悲深き聖女像」と「現実の聖女」が乖離しているように

思われ、悩み、葛藤する日々。

そんな惑う私に答えをくれたのが、所管する第一騎士団の新人騎士だった。

聖女についての考えを問われた彼女は——フィーアは心底おかしそうに笑うと、そもそも私たちの聖女像が間違っていると断じたのだ。

『あなた方は、聖女をどうしたいのですか？ 祀り上げて、女神にでもするおつもりですか？ ふふふ、違いますよ。聖女は、そんな遠くて、気まぐれ程度にしか救いを与えない存在ではないんです。聖女はね、騎士の盾なんですよ』

——フィーアが示した聖女像は、私たちが長年かけて作り上げたそれより、何倍も美しいものだった。

あまりに美しいものを示されたため戸惑い、魅了されかけたけれど、——

私の中にある冷静な部分が顔を出し、現実にそんな聖女はいないと自分自身に言い聞かせる。

そして、自身を納得させるため常識的な答えを探求した。

つまり、フィーアにそのような発言ができたのは、彼女が聖女でないからだ
と。

フィーアが騎士だからこそ、理想と希望を込めて美しい聖女像を描くことが
できたのであり、実際に聖女であったならば同じ言葉は言えないはずだと結論
付けたのだ。

にもかかわらず、フィーアは凜とした声ではっきりと答えた。

『もしも私が聖女様だったとしても、私は同じことを言います』

—— ああ、確かにそうだろう。

フィーアの言葉はすくと胸に落ちてきて、素直に彼女の言葉を信じる事ができた。

何の根拠も示さないフィーアの言葉を、そのまま受け入れることができたのだ。

それは、物事を判断する時、必ず根拠や理由を必要とする私にとって、滅多にないことだった。

——フィーアの考えや思想はいつだって私の斜め上をいき、……突拍子もないものも多いけれど、必ず私の考えを超えていくものだった。

恐らくフィーアの正しいもの、美しいものを純粹に追求していく姿勢が、同様の結果を呼び込むのだろう、……などと冷静に考察できていたのはサザランドを訪問するまでだ。

サザランドは私の領地であり、守るべき民がいる場所であるにもかかわらず、その場所を訪れるのは年に一度きりだった。

私に聖女の矛盾を突き付けた始まりの場所——それがサザランドだったからだ。

私の母は聖女として、国一番の実力を持っていたけれど、——私の望む聖女像とはかけ離れていた。

多くの傷を治せる奇跡の御力を与えられた存在であったというのに、治癒する相手を選び、その能力を出し惜しみしていたからだ。

結果、母は住民たちに厭われ、不幸な事故が重なって帰らぬ人となった。

——聖女は誰よりも何よりも尊ぶべき存在だと、未だ考えていた私だったけれど、母の死を聞いた時には『仕方がない』と心のどこかで納得してしまつた。

幼い頃から、聖女の言動を無条件に受け入れ、敬うべきだと学んできたのだけれど、……治癒する相手を選択し命を選別する母に、納得できない気持ちを捨て去ることができなかったからだ。

一方、父は母の死を確認した瞬間、激高したという。

『国の礎たる、王国の次席聖女様であらせられるぞ！　ここにいるお前たちと、その一族全ての命で聖女様に償え!!』——と。

父は私よりも母の側において、その言動をよく見知っていたにもかかわらず、母の言動に幻滅も失望もせず、奇跡の御力を持つという一点で心から母を敬つ

ていたのだ。

父と同じように聖女を敬愛できないこと、父母を同時に亡くしたこと、領地の民と対立関係になったことで、私は昇華できない様々な想いを抱えていたが、

——フィーアを領地に連れて行ったことで、全て払拭された。

そもそもフィーアを領地に同行したのは、彼女の正しいもの、美しいものだけをみつめようとする瞳で、私の行動の善悪を見極めてもらおうと思ったからだ。

私に対応を誤っていたのならば、忌憚なくそのことを指摘してほしいと考えたのだ。

そのことがフィーアにできる精一杯だと考えていたし、サザランドの民との

間に入った亀裂はもはや10年、20年で修復できるものではなかったので、関係改善に助力してもらうつもりは毛頭なかった。

にもかかわらず——フィーアは奇跡としか呼べないような結果を引き起こした。

大聖女信仰の強い土地であるサザランドで、大聖女の生まれ変わりだと認定されたのだ。

結果、住民の誰もがフィーアを受け入れ、フィーアが所属する騎士を受け入れ、騎士を束ねるサザランド公爵家を受け入れた。

サザランドの民が、——完全なる和解を受け入れたのだ。

それは私の代で成し得るとは決して思えなかった偉業だった。

茫然とする私に対し、フィーアは心配そうに尋ねてきた。

『私が大聖女様の生まれ変わり役をしたことは、団長的には大丈夫だったんですかね？ シリル団長の中にあつた大聖女様像を壊したりはしていませんか？』
何と愚かな質問だろう。

もちろん壊されたに決まっている。

私の中にどのような大聖女像があつたとしても、フィアはそれを超えてきたのだから。

——その瞬間、私は言葉にできない、胸が震えるような感情に満たされた。

圧倒的な感動と感謝、それから、恐れ敬う畏敬の気持ちだつた。

ああ、恐らく騎士が聖女に抱く敬愛の気持ちは、このようなものであるべきなのだ——私は生まれて初めて、そう実感することができた。

だというのに、フィーアは自分の偉業をひけらかすでもなく、嬉しそうに笑った。

『よかったですね、団長。団長の優しさが住民たちに伝わったんですよ』

まるで、この奇跡の和解をもたらしたのは、私の人柄だともいうように。

その言葉を聞いた瞬間、胸に込み上げるものを感じ、フィーアの前に跪いていた。

「たとえあなたにとって簡単な出来事だったとしても、……だからこそ、あなた自身がその価値を理解していないとしても、私はその重さを理解しています。そして、この恩義を決して忘れはしません。フィーア、私はいつか必ず、あなたにこの恩を返しましょう。騎士として、あなたに誓います」

心からの言葉が自然に零れ落ち、気付いた時にはフィーアに騎士の誓いを行

っていた。

視界の端に、驚きで目を見張ったサヴィス総長が見える。

——そうでしょうとも。

私だって驚いている。

私が騎士の誓いを行う相手は聖女だと、私自身も長年信じてきたのだから…

…



「……ですが、何度思い返してみても、あの場面でフィーアに騎士の誓いを行う以外の選択肢はなかったでしょうね」

サザランドでフィーアに誓いを立てた時の場面を思い返していた私は、深夜の執務室でぼつりと独り言を呟いた。

それから、これほど思考が乱れるようでは、これ以上仕事をしても効率が悪いただけだと諦めてペンを置く。

先ほどまで外出していたので、急ぎの仕事が溜まっていないかと執務室に戻ってきたのだが、どうにも集中できそうになかった。

恐らく、フィーアが遠地に出掛けて行くことが気になっているのだろう。

「……今日はこれまでにして、明日の朝はフィーアを見送ることにしましょうか」

明日、フィーアはカーティスとともにガザード辺境伯領に向けて出立する予定になっていた。

遠足に行くようなわくわくした気持ちで早朝に立つのだろうと微笑ましい気持ちになりながら、フィーアたちを見送るため普段よりも早く起きようと心に決める。

そのためにも、今夜は休むべきだなと執務塔を後にし、宿舎に向かって歩いていると、がちやがちやと扉を揺さぶっているような音が聞こえた。

不審に思い、音がした場所に足を運ぶと、……どういうわけか、先ほどまで私の思考を占有していた少女騎士——フィーア・ルードが食堂の扉を開けようとしている場面に出くわした。

時刻はとっくに日付をまたいでおり、こんな時間に何をやっているのだろう

と声を掛ける。

「フイーア、何をやっているのですか？」

「ふえっ！」

フイーアは驚いたように振り返ると、私に気付いて嬉しそうな声を上げた。

「シリル団長！ よ、よかった、どういうわけか食堂の扉が開かなくて困っていたんです。開けるのを手伝ってください」

「いえ、食堂はすでに閉まっているので、施錠してあるはずですよ。何がほしいのですか？」

「お水がほしいです。喉が渴いて……」

へによりとした表情で口を開くフイーアを見て、あ、これは酔っているなと気付く。

所用で参加できなかったが、今夜はカーティスがフィアを連れて訓練修了のお祝いをしていたはずだ。そこでフィアはお酒を飲んだのだろう。

カーティスがこの場にいないことから、恐らくフィアは一旦騎士寮まで送り届けられたに違いない。

それなのに食堂まで水を求めて来たと言うことは、寮内にある水道に思い至らないほど酔っているのだろう。

「少しお待ちいただけるのであれば、執務室から水を取ってきますが」

「ありがとうございます！ 私はどれだけでもシリル団長を待てますよ」
フィアが嬉しそうに答える。

酔っ払いを暗がりの中に置いて行くのは不安だったけれど、歩かせるのはもつと不安だったため、近くにあったベンチにフィアを座らせる。

夜も更けていたため、このような時間に城内をうろつく者などいないだろうと思いつつも、フィーアが心配で足早に戻ってくる。

すると、フィーアは別れた時と同じ姿勢で、ぼんやりとした様子で空を眺めていた。

「何か面白いものでも見えますか？」

隣に座りながら声を掛けると、フィーアは空を見上げたまま返事をした。

「いいえ、何も見えません。空で一番輝く星を見たいと思っただけですが……」

「ああ、シリウス星ですか。あいにく今夜は曇っていて、星は見えそうにありませんね」

そう言いながら水の入ったグラスを差し出すと、フィーアはお礼を言っ、手を伸ばしてきた。

そして、両手でグラスを掴むと、ごくごくと一気に飲み干す。

その勢いを見て、食器棚の一番手前にあつた、洒落てはいるが容量の少ないグラスを選ぶべきではなかったなと反省する。

「もう一杯必要ですか？ それとも、明日は早いでしょうから、騎士寮までお送りしましょうか？」

「え、私は明日、早いんですか？ 特別任務でもありましたっけ？」
不思議そうに尋ねてくるフィーアは、どこから見ても立派な酔っ払いだった。近くで見ると、顔も赤い。

「明日は、ガザード辺境伯領へ向けて出発するのでしょうか？ 霊峰黒嶽がある地域ですよ」

ガザードの名前に聞き覚えがなさそうだったので、黒竜が棲む山がある一帯

であることを補足する。

すると、フィーアは嬉しそうに顔をほころばせた。

「ああ、私はザビリアに会いに行くのでした！ うふうふうふ、ザビリアにたくさんのお土産を持っていくんです」

フィーアは黒竜へのお土産を指折り数えて教えてくれたけれど、その内容は菓子と花で、三大魔獣の一角である黒竜がそのような子ども向けの土産を喜ぶかは疑問に思われた。

その後、フィーアは黒竜について嬉しそうに話をしていたけれど、途中で秘密にすべき内容だったと気が付いたようで、慌てた様に口を押えた。

「し、しまった！ これはシリル団長には秘密でした。黒竜を従魔にしたことがバレたら、そして、ザビリアを霊峰黒嶽に帰したことがバレたら、凶悪な魔

物を簡単に野に放つなんてとんでもない、と説教されますからね。ですから、聞かなかったことにしてください」

大真面目な顔で頼んでくるフィーアを前に、私は天を仰いだ。

「……本日は、クエンティンから賄賂の收受を宣言され、ザカリーから不正の見逃しを申し入れられ、あなたからは第一級の秘密を暴露された上で聞かなかったことにしてくれと頼まれるなんて……」

何という日でしょうね、と口の中で呟く。

それから、私はちらりとフィーアを横目に見た。

「フィーア、ご存じかとは思いますが、黒竜はナーヴ王国の守護獣です」

「はい、知っています」

素直に頷くフィーアに対し、私はそそのかすような言葉を続けた。

「あなたが黒竜を従わせることができると分かれば、あなたの価値は何倍にも跳ね上がります」

「それは、……王国のためになるような行動をザビリアがしたら、ですよね。そんな理由で、お友達に頼みごとをするのはいかなものですかね」

「あなたの価値が、……たとえば、高位の聖女様ほどに上がるとしてもでしょうか？」

「私を知っている人は、私の従魔が黒竜かどうかで評価を変えませんよ。私を知らない人から評価されるよりも、私はお友達を大事にしたいです」

何ともフィーアらしい答えだった。

何度確認しても、フィーアは自分の価値より大事にするものがあるのだ。

そして、欲にまみれた人々を大勢見てきた私にとって、フィーアの姿は非常

に好ましく映った。

そのため、筆頭公爵、あるいは筆頭騎士団長の立場上、王国のために黒竜を効果的に使役するよう頼むべきだと思うものの、それ以上フィアに強要する気持ちになれなかった。

私は明日以降のことに話題を変える。

「カーティスが同行するので大丈夫だとは思いますが、霊峰黒嶽は凶悪な魔物が数多く棲む山です。ガザード辺境伯を警備している第十一騎士団と合流するまでは、あの山に足を踏み入れないでくださいね」

フィアは理解したという様子で、こくこくと何度も頷いた。

「分かりました！ でも、グリーンとブルーがいれば何とかかなるような、ならないような……」

聞き覚えのない名前が出てきたため、フィーアに質問する。

「そのお2人は初めて聞く名前ですね。どなたです？」

「どなた……なのでしょね。アルテアガ帝国出身……なのは秘密でした。ええと、その、それなりの冒険者ですよ、きつと。そして、霊峰黒嶽に同行してもらうんです」

酔っているフィーアは、話してはいけないことをぺらぺらとしゃべる。

アルテアガ帝国出身でグリーンとブルーと聞けば、帝国で最も尊き血を引く皇家の兄弟を連想させるが、……そのような高貴な兄弟がふらりと我が国を訪れるはずもないため、偶然なのだろうと片付ける。そもそも、よくある名前だ。

「そうですか。同行者のことをよく知らないなんて、あなたらしいですね。カーティスが同行を許可したのであれば、問題ない人物なのでしょうが。いずれ

にしても、危険な場所に間違いはないので、十分気を付けてくださいね」

「ええ、もちろんです。危険なことは一切しません！」

フィーアは元気に約束してくれたが、どういうわけか信用することができなかつた。

なぜならフィーアの問題は、本人にその気がないにもかかわらず、いつだってトラブルの方から寄ってこられることだからだ。

明日の朝、決して無茶をしないよう、カーティスにもう一度念を押そうと心に決める。

それから、フィーアの手を取ると、正面から見つめた。

「フィーア、私はあなたに騎士の誓いを行いました。あなたが私にしてくれた恩義を忘れず、いつか必ず返すと。だから、あなたは……私に約束を守らせる

ため、無事に戻ってこなければいけませんよ」

フィーアはきよとんとした表情で私を見つめていたけれど、不意ににこりと微笑んだ。

「うふうふうふ、分かりました！　つまり、霊峰黒嶽のお土産がほしいということですね。任せてください」

——酔っぱらいに真意を理解させるのは難しいと悟った瞬間だった。

そして、どのみち今夜のことを覚えていないだろうなと思った私は、——翌朝、フィーアを見送るため、普段よりも早い時間に城門近くで待っていた。すると、なぜかデズモンド、クエンティン、ザカリーまで見送りに来たので、通りすぎる者たちから、これほど多くの騎士団長が揃うなんて、国王陛下の出

立に違いないと勘違いされた。

——勿論、騎士の誓いを行った私にとって、フィーアは陛下と同じくらいに価値がある相手ではあったのだけれど。

だからこそ、カーティスと楽しそうに出掛けていくフィーアの後ろ姿に、無事に戻ってきますようにと、私は心から祈りを捧げた。



お読みいただき、ありがとうございました！